

37. シリンジ採血後、採血管への血液分注方法による溶血影響 - 採血で気になること・・・ -

八賀 孝浩・谷地 美貴・八重樫 一生（新松戸中央総合病院）

【目的】

シリンジ採血後は、真空採血とは異なり、必ず採血管に分注する作業が必要となる。その際に手技を誤ると検体が溶血してしまう場合がある。今回、我々はいくつかの分注方法において、どのような溶血度合いが生じるか検証した。

【対象と方法】

当検査科のスタッフより10mlシリンジ（22G採血針使用）にて約10ml採血し、以下の4通りの方法で血液を採血管に入れてもらう（約2ml）  
（1）採血管の蓋、採血針ともに取り、管壁に沿って圧入。（2）採血管の蓋は取り、採血針はつけた状態で管壁に沿って圧入。（3）採血管の蓋、採血針ともにつけた状態で管壁に沿って分注。（4）採血管の蓋はつけたまま、採血針を翼状針に変えて、管壁に沿って分注。

採取した血液は室温放置後、凝固を確認してから遠心分離し、溶血にて影響を受ける項目（AST、LDH、K）を測定した。また、溶血度合を表すのに吸光度（410nm - 480nm）で示した。

この手順を検査科スタッフ6名にて行い、比較検証した。また、採血後、1度抗凝固剤入り採血管に入れ、血球にダメージを与えた状態でも上記の方法にて検証してみた。

【結果】

肉眼的には、すべての検体において溶血はみられなかった。また、測定値・吸光度においては、全ての方法で目立った影響は見られなかった。

【まとめ】

今回の検証での分注方法においては、溶血影響は見られなかったが、今後も溶血影響を回避できるような手技にて採血に取り組んでいきたい。

047-345-1116（直通）